なぜか吸い込まれた俺の学校生活

藤龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
なぜか吸い込まれた俺の学校生活

【Ｎコード】
Ｎ８０６３Ｔ

【作者名】
藤龍

【あらすじ】
バカなことして異世界に飛ばされた俺、天羅新人。　飛ばされた先では人も人ならぬものもともに勉強している学校だった。
俺はほぼ強制的にそこでいっしょに勉強する事になったのだが……。
これ、もう学校じゃねえ！！

第一話　世界初！　ＢＨに吸い込まれた男！

すべては２０ＸＸ年、人類が海外旅行と同様にに宇宙にいけるようなった時代のあの時から始まった。

俺、天羅新人（てんらニイト）は家族で金星旅行に行った。

金星つっても大したものはない。　ただ、星によって地球の見え方や見える別の星が変わってくるからという理由で夏休みを機に金星に行く事になった。

で、実際に金星に行って地球を見た。

父「やっぱり月から見るのとはまた違うな」

宇宙マニアの親父はしみじみ言った。

ここではっきりと言わせてもらおう。

俺は惑星には興味がない。

興味があるのは太陽、冥王星そしてブラックホールのみだ。

だが、それらの場所は法律で行く事が禁じられているので（あたりまえだ。危険にも程がある）、未だに近くで見たことがない。

だから俺は意を決した！！

親の目を盗んで、コピー人形使って、俺は大宇宙へと旅立った！！

目的地はブラックホール。

理由は未だに誰も近くまで見に行った事がないからだ。

無重力カメラを首にかけ、俺は泳いだ。

そしてようやく海王星が見える場所まで来たその時、海王星の手前あたりでなにかが渦巻いてるのを見つけた。

……まさかあれが……（◎ｏ◎）……ブラックホール??

ていうかブラックホールって太陽系にあったんだ??

確か銀河系の彼方じゃなかったっけ??

そう思うが速いか、俺はカメラのシャッターを押した。

パシャ！　パシャ！　パシャ！

よし、あとはもうちょっと近くで……！

俺は渦に近づいた。

……この行動が愚かだったと思う。　ここでおとなしく金星に戻ってりゃ良かったと思う。

だってねぇ……、この後まさかあんなことになるだなんてねぇ……。

話を戻そう。

俺は渦に近づき、シャッターを押そうとした。

だが、あまりの吸引力により、押すまもなく俺はブラックホールの中心部、ホワイトホールへとご案内〜♪

……俺、このとき本当に死んだと思った。

このまましばらくはコピーが俺の代役を務めるけどそれも電池切れになったら終了だ。

そうなったらこのまま永久に行方不明者だ。

おそらく捜索隊は宇宙にも来るだろう。　でも光でも抜け出せない渦の狭間にいるなんて誰が思う。

でもまあ、結果的には助かった方なのかなぁ……??

ま、こんなもんだろ。

～～～～～過去話はこの辺で～～～～～

俺は今、どっかの部屋のベッドで寝ている。

さっきまでの話は俺が現状を整理するためのものだ。

服は宇宙服を脱がされ、その下に着ていた私服だ。

ここ、どこだよ……。

？「あ、気づいた？」

すぐそばの椅子に座って机に向かっていた一人の男性が俺の方を見て、話しかけてきた。

俺「あ、はい」

？「よかった……。　キミ、三日間も寝てたんだよ」

俺「三日！？」

？「一体何があったんだい？　気づいたらこの学校の目の前に倒れていたし」

……学校？　じゃあ地球なのかここは？

俺「ここ……地球なのか？」

？「何言ってるの、地球に決まってるじゃん」

俺「……そっか、なら良かった」

ＢＨ(ブラックホール)に吸い込まれた先が地球でよかった。　光でも抜け出せないような空間だったらぜってぇ孤独死する。

？「名前、なんて言うの？」

俺「え、ああ。　俺は天羅新人。　天羅かニイトでいい。　ちなみにニートって伸ばすなよ？」

？「そうか。　よろしく、ニイト。　僕は取山鉄也(とるやまテツヤ)。　テツヤでいいよ」

俺「おう。　よろしくな、テツヤ」

お互いに自己紹介が終わった後、扉が開きそこから一匹の動物が入ってきた。

……シカ？　でもなんで二足歩行？　あ、タヌキか？

？「怪我人は目覚めたのか？」

俺「喋った！！」

テツヤ「うん。　一応話してみたところ、悪い人ではなさそうだ」

？「そうか、それは良かった。　あ、俺はトニー・トニー・チョッパー。　チョッパーって呼んでくれ」

テツヤ「ちなみに現保健委員長」

俺「あ、天羅新人ッス。　天羅かニイトって呼んでください。
……って普通に自己紹介してる場合か！！　シカかタヌキか知らないけどなんで二足歩行！？　ていうかそれ以前にここ本当に学校、地球！！？　どっかの怪しい実験室かなんかじゃないの！！？」

チョッパー「変なこと言うやつだな。　ここは確かに地球だぞ」

おかしい……！　もしかして俺が寝ていた三日間の間に広大な科学革命でも起きて、動物が喋れるようになったのか！？

テツヤ「ふむ……。　どうやら僕らがいるこの地球は、ニイトたちがいる地球とは違うみたいだね。　俗に言う平行世界（パラレルワールド）ってやつかな？」

俺「平行世界（パラレルワールド）？」

チョッパー「そうか！　なあニイト、お前目が覚める前に何か変わったことはなかったか？」

俺「変わったこと……あ！！　もしかして……！！」

俺はその後二人に宇宙での出来事を話した。

～～～～～んで15分後～～～～～

テツヤ「……なるほど、ではそのブラックホールが僕たちの世界への入口となったわけだね」

俺「そうだったのか……俺、どうすりゃいいんだ……」

正直絶望していた。　今のところどうやってもとの世界へ戻ればいいのか分からん。

チョッパー「……じゃあ、しばらくこの学校に通うか？」

俺「は！？　なんでそうなる！！」

テツヤ「そうかそれは名案だね。　この学校ならもしかしたら元の世界への手がかりもつかめるかもしれないし」

俺「いや、ちょっとまt「大丈夫、この学校は寮があるからそこで暮らせばいいし」いや、だから……！」

いや別に何の手がかりもなくこの世界を歩き続けるよりはマシだけどさ……！

チョッパー「よし、そうと決まれば早速校長に掛け合ってみる！」

テツヤ「よろしく～」

チョッパーは部屋を出て行った。

……なんか死亡フラグっぽいのがばりばり立ってるんだけど……。

テツヤ「大丈夫。　分からない事は教えてあげるから」

……もう、どうにでもなれ。

こうして俺はここ……

俺「なあ、この学校なんて名前だ？」

テツヤ「ああ。　ディファレント・ディメンション・スクール。
　略してＤＤＳだよ」

長……。

こうして俺はめでたくＤＤＳに入学した。

……めでたいのか、これ。

第一話　世界初！　ＢＨに吸い込まれた男！　（後書き）

gd gd気味ですが、よろしくお願いします。

第二話　新しいクラス！　でもなんか怖い

ほぼ強引に、俺は「ディファレント・ディメンション・スクール」略してＤＤＳに通うことになった俺。

ちなみに今、これから俺が入ることになるクラスの前に立っている。

……ものすごい緊張している。

あのあとチョッパーが戻ってきてから、すぐに、なんの書類等も必要なしに転入生となった。

ちなみにクラスは、Ｂ組。

先生？「では、入ってきてください」

クラスの中から呼ばれた。

俺はドアを開け、中に入った。

俺「は、初めまして。　天羅新人です。　よろしくお願いします」

先生「彼はものすごく遠いところから来たらしい。　何か分からない事があれば教えてあげてくれ。　そうだな……」

先生はあごをつまみ、教室の中をじっと見た。

先生「よし、水音寺（すいいんじ）の横が開いてるな。　そこに座りなさい」

俺「あ、はい。　わかりました」

俺は窓際一番後ろの席に座った。

先生「では、これにて朝の会は終了する」

「ありがとーございましたー」

〜〜〜〜〜準備時間〜〜〜〜〜

水音寺「あの、天羅くん……だよね？」

俺「え？　はい、そうです」

水音寺「よかった、あってた……。　あ、あたしの名前は水音寺未来（ミライ）。　わからないことがあったら何でも聞いてね」

俺「ああ、よろしくな水音J「ミライでいいよ」じゃあ、ミライ。　俺の名前は天羅新人。　ニイトでいい」

ミライ「うん、よろしくニイト」

俺「早速だが、聞きたいことがある。　実はまだテツヤ以外のクラスメイトを把握できてないんだ。　できれば紹介してくれないか？」

ミライ「うん、いいよ」

その後俺はミライに案内させられて、クラスメイトたちを知った。

クラスメイトのことは今まとめて書こう。

ちなみに順番は適当だからそこんとこよろしく。

取山鉄也（男）：銀髪で、目は黄がかかった茶。　さっき会ったので詳しい事はなし。

水音寺未来（女）：キレイな水色の髪で、目は薄い緑。　元気がある感じ。　胸は大きくもなく小さくもない。

桜庭音操（ネク）（男）：青いヘッドフォンをいつもつけている。　実はいいやつらしい。　隣のクラスに彼女がいるらしい。

桐生義弥（ヨシヤ）（男）：通称ヨシュア。　おぼっちゃまな感じで、どこか生意気な感じがする。　頭の回転がものすごく速く、ずる賢いらしい。

尾藤大輔之丞（ダイスケノジョウ）（男）：通称ビイト。　スケボーに乗るのが好きらしい。　ネクの大親友でもあるとのこと。

綾崎ハヤテ（男）：執事服をいつも身に着けている。　いつも敬語。　主でもあり彼女でもある人を守るためならなんでもするらしい。

三千院ナギ（女）：ハヤテの主で引きこもりクイーンの称号を持つほどの人間。　金髪のツインテールで、ツンデレらしい。

プリニー（男）：語尾に必ず「～ッス」が付くらしい。　見た目青いペンギン。　金の亡者という噂も。

ラハール（男）：見た目１３，４歳だが実際はもっと行ってるらしい。　人間っぽいが、人間とは思えないほど怖い。

エトナ（女）：赤髪で悪魔な感じがバリバリする。　見た目からしてＳ。　胸がかなり小さいが……そのことに触れてはいけない気がする。

フロン（女）：金髪のストレートで青いリボンをつけている。
誰にでも優しいらしいが天然らしい。
鬼神蔵人（クロウド）（男）：すまん、最初女と見間違えた。　話してみて、気はいいやつだと思ったが、ミライ曰く外道らしい。
鬼神零（レイ）（男）：クロウドの弟らしい。　兄と違って基本敬語。
　だが、切れるとやはりドSになるらしい。
サフィー（女）：白い帽子をかぶっていて、髪の毛が少々爆発している。　切れるとやはり怖いらしい。　戦闘時にはなにかが起こるらしい。
キララ（女）：黒と白の二色ですべてを決めている（見た目）……と思ったら右目が黄色で左目が水色のオッドアイだった。　喧嘩好きらしいが仲間思いらしい。

こうやって改めて見るとSばっかりだな……。

ところで……。

俺「なあ、さっきからわからなかったんだけど、「戦闘時」って何？」

ミライ「え？　知らないの？」

俺「だからなにを」

テツヤ「この学校、色々と所持してるから、よく狙われるんだ」

うぉ！　テツヤ、いつの間に！

ミライ「ほんと、校長もいい加減処分してほしいわよね」

テツヤ「でも、処分したらしたらで後々大変だからね……」

俺「そんなにヤバイもんなのか？」

ミライ「やばいもなにも、モノによっては世界が滅びかねないものもあるのよ？」

正直驚いた。　そして改めて自分の愚かさを呪った。

なんであのときブラックホールに行こうだなんて考えたんだ！！
　それにもし無事に帰れたとしても一応違法だぞ！！

そのとき……

ブーブーブーブー！！

スピーカーから謎のサイレンっぽいのが鳴った。

テツヤ「この状況で来てしまったか……」

俺「な、何が！？」

ミライ「敵よ。　ほら、もうそこにいる」

ミライは俺の背後を指差した。

俺はゆっくりと後ろを見た……ミイラだ！！

俺「ぎょわあああああああ！！！」

俺はパニクった。

まじで神様助けてください！！　もう違法なんてしませんから、もうバカな考えは捨てていい子にしますから！！

俺がそんな事を考えてると、テツヤが手から光を放ち、その中から一冊の本を出した。

いや、本とかじゃなくてもうちょっと殺傷力のある武器を！！

そうこうしてる間にもミイラは包帯使って俺を喰おうとしてるし！

包帯が触手のように動いてるし！！

テツヤ「現世に蘇りし悪霊よ。　現世から離れ、その罪を償え」

テツヤは本を開きながら、それでも視線はミイラから話さず本を音読した。

そして左手に本を持ち、右手をミイラにかざした。

テツヤ「光よ、彷徨いし魂に救済の光を。　邪霊殲滅（アーケルミーン）」

ミイラはやさしい光に包まれ、消え去った。

俺「な、なにが……」

ミライ「はい、これあげる」

俺はミライから一本の剣をもらった。

……剣？

ミライ「自分の身は自分で守るのよ」

え……えええええええええ！！？

テツヤ「じゃ、次行きますか」

俺はこのあと、魔物どもと戦う事になってしまった。

……はじまってまだ二話目だがもうこれ、学園モノじゃないだろ！！

第三話　素人だよ？一応素人だよ？？（前書き）

久しぶりの更新です。

・・・の割にはgdgdです。

第三話　素人だよ？一応素人だよ？？

俺はミライから剣を受け取り、魔物と真正面から戦う事になった。

なんで俺、こんなことになっているんだろう。

戦闘経験なんて全くないし……。

素人がいきなり剣渡されてもどうすりゃいいかわからねえ……。

て、そうこう言ってる間に……来たよ！！

やばいよ、こんどは団体だよ！！　呼んでないよ！！

ミライ「いいから対抗しなさい！！　剣の使い方くらい前の学校で教わったでしょ！？」

教わってねえよ！！　ていうかこの学校だけじゃねえのかよ！！

ミライはレイピア（？）を突いている。　……フェンシングか？

テツヤ「燃やし尽くせ！　火山炎（ボルガノン）！」

テツヤの炎が、魔物を消し去った。

そして俺は……

俺「来るな！　来るな！！　来るな！！！」

剣をただ振り回しているだけだ。　迷惑きまわりない。

？？？「おいおい、そんなんじゃ危ねえだろ……」

声の主は鬼神（兄）だった。

クロウド「面倒くさいからクロウドでいい。　それにしてもその無鉄砲な攻撃……大丈夫か？」

レイ「兄さん、こっちにも！」

クロウド「ＯＫ！　マシンガン、リフレクショット！」

クロウドは様々な方向にマシンガンを放った。

放たれた弾は壁に当たると跳ね返り、魔物目掛けて飛んでいった。

……いまさらだが、この学校銃刀法とか無視してないか？

レイ「はいはいはいはいこれでおしまい」

レイは魔物とすれ違うたびに剣を振り、進んでいった。

テツヤ「このフロアはこれでＯＫだな？」

クロウド「まあ、そんなとこだろう」

俺「……まさかほかのとこにもいるの！？」

レイ「あたりまえです」

なんなんだよこの学校！　入ってきていきなりミイラだかゾンビだかなんだかと戦うはめになるだなんて！！

しかもいままで授業なんてやってないぞ！！

ミライ「じゃ、二階に行きましょうか」

俺たちは階段を使って移動した（ちなみにさっきは三階）。

～～～～～なんだかんだで二階～～～～～

ラハール「オレ様に勝とうなんて１０００年早いわッ！！！」

プリニー「ちょ、ちょっと殿下、暴れすぎッスよ！！」

エトナ「キャハハハハ！　全部ぶち壊してあげるわよ！！」

フロン「や、やめましょうねそんな怖いこと言うの……」

？？？「とか言っておきながらよそ見して弓放つな！！　さっきから俺の方に飛んでるぞ！！」

？？？「エトナーーーッ！！　ストップストップ！！」

？？？「いい加減みなさん落ち着きましょうねー」

もう壊滅状態だ。　しかも魔物による被害よりこいつらによる被害の方がでかい……。

ミライ「ちなみに、あの赤マフラーがカイトで黒マフラーがレオン。
双子みたい。　で、あっちの黒髪の人はアイリン」

……とりあえず、二階は大丈夫だろう……。　壊滅状態だが。

〜〜〜〜〜一階……〜〜〜〜〜

サフィー「キララ、ニトロチャージ！！」

キララ（？）「オラアアアア！！」

……あれ、キララって確か人だったよね？　なんでいまシマウマになってんの？？

ミライ「キララはポケモンなの」

俺「ポケ……？？」

テツヤ「ま、普段は人間になってるし害はない。　というかポケモンは全体的に害はないからな」

話が見えない。　ポケモンってなこの世界の種族みたいなもんなのか？

サフィー「ゼロ、竜の波動！　ガゼル、蝶の舞から熱風！！」

龍（？）「グルアアアア！！」

蛾（？）「ウッヒャー！！」

……ちょっとまて、あんなのもポケモンなのか！？

テツヤ「あのキュレムがゼロでウルガモスがガゼルだ。　そしてサフィーはそれらを使役するポケモントレーナー」

サフィー「……「使役」って言い方、好きじゃないな。　「共に戦ってる」って言ってほしいんだけど」

……要約すると、キララ、ゼロ、ガゼルがポケモンで、非常時にはサフィーと共に戦うってことか。

キララ「このフロアはこれでＯＫね」

ガゼル「姉御力入れすぎだよ……」

ゼロ「不生者（アンライブ）相手にここまでやる必要あるか？」

確かにここも壊滅状態だ。　まあ、上には劣るけど。

キララ「アタイだけのせいにするなよ！　あんたらも力だしまくってたでしょうが！」

ゼロ・ガゼル「あたっ！」

キララは一発ずつ二人を殴った。

ちなみにゼロとガゼルはいまは人間に戻っている。

ところで……。

俺「なあ、『不生者(アンライブ)』ってなんだ？」

サフィー「『不生者(アンライブ)』というのは、さっきのゾンビとかのような魔物のこと。　不生者(アンライブ)という名前は校長が便宜上付けた名前だから、学校によっては違うかもね。　不生者(アンライブ)を簡単に説明すると、一度死んだはずの人間が中途半端に蘇ったモノ。　こいつらを倒すために必要な武器や能力はないみたい」

俺「なんでそんなのがこの学校に出るんだ？」

レイ「それに関してはいろいろと説があるのですが……。　大きな理由としてはこの学校の宝物庫にかなり危険なものが集まっていて、それを狙って出没する。　別ので言えば、この学校。　昔は墓場だったらしいです」

墓場！？　墓場だったのか！？

それに危険なものってなんだよ！！　原爆か、原爆なのか！？

クロウド「どうしてそれを持ち出す！　読者の気持ちも考えろ！！」

ゼロ「でもおそらくそんな生ぬるいものじゃないだろ」

生ぬるいのか？　生ぬるいのか！？

俺「……そういや、俺、いつになったら校長に会えるんだ？」

キララ「え、まだ会ってないの！？」

テツヤ「あの人は気まぐれだからね。　多分そのうち会えると思うけど」

……そっか。　でも校長ってどんな人なんだ？

ガゼル「次行こうぜ」

俺たちは校舎を出て、校庭へ向かった。

……ねえ、いつになったら終わるの！？　いつになったら授業始まるの！？

第三話　素人だよ？一応素人だよ？？　（後書き）

ほんといつになったら授業に入るんだろう・・・。

おそらく次回で戦闘は終わると思います。

第四話　はやく授業しようよ……（前書き）

七夕……一組のカップルが一年に一度会うことの出来る日。

……でも織姫と彦星の距離って何光年もあるから一日で会うのは不可能なんじゃないのか？？

第四話　はやく授業しようよ……

校庭はもうすでに、たくさんの生徒と魔物と武器で埋め尽くされていた。

……よく同士討ちにならないな。

いろいろな声が聞こえる。

「ゴムゴムのぉ～！」　「錬金！」　「行くよ！」　「ザケルガァ！！」　「疾風（はやて）の如く！」

……聞き取れたのはこれくらいだ。　でももっといる。

ミライ「ここにいる人たち全員紹介してるとキリが無いからまた次の機会にね」

いや、紹介しなくていいけど。

サフィー「ところで、今回親玉はいないのかな？」

クロウド「いや、それはありえない。　親玉がいないとこいつらはここまで活性化されない」

親玉までいるのか……。　本当に愉快な学校だな（汗）。

ゼロ「……屋上に、なんかいる！」

レイ「本当ですか！？」

テツヤ「確かに……この気配、結構でかいぞ」
あの……まさかこれからそいつをぶち倒すために屋上へ行くとかそんな展開にはｎ「よし、行くぞ！」マジっすか！？

～～～～～屋上……～～～～～
キララ「これは……！」
屋上にいたのは闇色の包帯を捲いた魔物だった。
いままでのミイラとは比べ物にならないほどのでかさだ。
ミライ「こいつが親玉ね！」
ガゼル「行くぞ！！」
全員（俺除く）が戦闘態勢になった。
え？　お前はいいのかって？
だって素人だよ！？　一緒に戦ったって足引っ張るのがオチじゃん！！
ミライ「サンクチュリオン！」
テツヤ「吹雪け、雪花（アイスロウン）の舞！」

レイ「魔弾の舞踊！」

クロウド「如来の棍、黄泉送り！」

サフィー「キララ、充電からワイルドボルト！　ゼロは凍える世界！　ガゼル、銀色の風！！」

キララ・ゼロ・ガゼル（ポケ版）「オリャーー！！」

全員、いままでとは比べ物にならないほどの力を使っている……。

でもなんか、おされ気味だ。

……なぜか、包帯（？）の何本かがこっちに向かってきてるんですけど……。

俺「て、いや、まじで狙われてるし！！」

俺はとっさに剣を振って包帯を切り刻んだ。　だが、その行為が逆に相手の怒りを買ったらしい。

怪物「ウガアアアア！！」

俺「ギャアアアア！！」

あああああああ！！！　これ絶対喰われるって！！

？？？「ハアーハッハッハッハッ！！　獄炎ナックル！！」

？？？「セクシー、ビーム！！」

???「ホーリーアロー！」

……いきなり目の前がまぶしくなった。　真っ赤になったと思ったら薄くなって最後に電球を直接見たときのような感じに……。

声の調子からしてあの3人だろう。

ラハール「まったく、なにをやってるのだ」

俺「すみません……」

エトナ「ま、親玉ぶっ飛ばしたからいいんじゃない？」

フロン「今回は何か取られた様子は？」

テツヤ「無しだ。　それにめぼしいものも持ってない」

レイ「はずれ、ですね」

ミライ「ま、これで他の連中は消えるはずよ。　結果オーライってとこね」

俺「あの……本当に訳がわからないんですけど？」

クロウド「じゃあ、説明しよう……と思ったけどこれから授業だから、授業が終わったら説明してやる」

じゅ、授業するんですか……この状況で。

〜〜〜〜〜〜3ーA〜〜〜〜〜〜

授業は本当に行われた。　まるで何事もなかったかのように。

先生「え〜であるからして、現在進行形はｂｅ動詞＋〜ｉｎｇということになります」

……中一の内容だ。

〜〜〜〜〜授業後〜〜〜〜〜

俺「……で、教えてくれ。　どうしてこうなってるのかを」

クロウド「ああ。　だが、こっちも一つ聞かせてくれ。　お前の前の学校には魔物はいなかったのか？」

俺「……いや、魔物はいない、っていうか初めて見た」

テツヤ以外「え？？」

俺「え……と、テツヤにはもう説明したんだけど、俺、別の世界から来たんだ」

俺は宇宙でのことを説明した。

〜〜〜〜で、説明後〜〜〜〜

ミライ「なるほど……」

プリニー「道理で無鉄砲なわけッス！」

俺「で、説明してくれ。　この世界はいったいなんなんだ？」

クロウド「……簡単に説明すると、魔物が大勢いて、魔軍が勢力を伸ばしている世界」

サフィー「で、全学校は人間など魔軍に所属していないものたちがいるから、狙われているってわけ」

ラハール「まったく、オレ様でもどうしようにも出来ないほどだ」

俺「……危険なものって言ってたよな？　それってなんなんだ？」

テツヤ「……持って来ていいのでしょうか？」

レイ「いいでしょう。　でも校長の許可を得てからにしてください」

テツヤ「……今からそのリストを持ってきますので、少々お待ち下さい」

……リスト！？　リストにするほど多いのか！？

テツヤは教室を出て行った。

……なんだかんだで厄介ごとに巻き込まれた気分。

第四話　はやく授業しようよ……（後書き）

やっと戦闘終了。

そして次回は危険物リストとなります。

……学園じゃなくてファンタジーにすべきか？

第五話　危険物リストを閲覧しよう（汗）（前書き）

今回は短めです。
そして校長がついに登場！

第五話　危険物リストを閲覧しよう（汗）

テツヤ「おまたせしました～」

しばらくして、テツヤが数枚の紙とともに教室に戻ってきた。

……こんなにあるの！？

ミライ「じゃ、遠慮しないで読んで」

展開的に拒否権なしだろ、俺。

神剣エクスカリバー
黄金に輝く剣。　この剣に斬れないものはない。　純粋な心の持ち主にしか使うことができず、悪しき魂を浄化することができる。

邪剣ゲルセイド
闇色に輝く剣。　エクスカリバーとは対となり、光を打ち消す。
　この剣の持ち主は、どんなに純粋な心の持ち主でも闇に堕ちてしまう。

幻想の槍
幻を打ち破る力を持つ。　相手の抱いている悪しき幻想をも打ち砕く。　これを使うには夢や幻に惑わされない心が必要。

魔道書スターダスト
光の隕石を落とす魔力を封じ込めた魔道書。　使うにはかなりの精神力と、かなりの修行が必要。

ディオーバードライバー
仮面ライダーディオーバーに変身するための道具。　その名の通り、すべてを超える力をもつ。　だが、変身するにはなんらかの条件が必要。

自縛神のカード
自縛神を封じ込めたカード。　死者を蘇らせ、その人間に復讐をさせる。　厳重に保管中。

謎の遺伝子
試験管にはいっている遺伝子。　なんなのかは不明。　だが、ものすごい力を感じる。

悪魔の実
パイナップル型の悪魔の実。　何の能力を秘めているかは不明。
だが、カナヅチになるのは確実。

……ここまで来て、読む気をなくした。　どういうものか大体読めてきた。

俗に言う最強装備ってところだろう。　あとは呪いとか。

まだ残りは大量にあるが、疲れてきた。

ハヤテ「もう、いいのですか？」

俺「ああ。　疲れた」

ヨシュア「ま、確かにその資料を全部読破した人は一桁しかいないからね」

そんなに少ないのかよ！！

そのとき、ガラガラと扉が開き、若い男が入ってきた。

ミライ「あ、校長先生」

？？？「やあ、久しぶりだねみんな」

こ、校長……！　この一見俺と大して年齢が変わらなさそうな男が！？

？？？「ん、君は……テラニートくん、だっけ？」

俺「テラニート言うな！！　天羅新人です」

？？？「ああ、そうだった天羅くんか。　はじめまして、俺の名前は藤原龍玄宗（りゅうげんそう）。　まあ、藤龍でいいよ」

藤原龍玄宗……突っ込んじゃだめだな、うん。

藤龍「にしても心外だな……。　まさかここまでの素質の者が来るとは……」

俺「素質？」

藤龍「確かに君は戦闘能力は皆無かもしれない。　でも、潜在能力はこの学校の誰よりも優れているはずだよ」

俺「潜在能力……」

そこで授業開始のチャイムが鳴った。　気づいたら藤龍はいなかった。

結局、授業にほとんど身が入らなかったことは言っておこう。

第五話　危険物リストを閲覧しよう（汗）（後書き）

藤「校長の正体は俺だ！！」
ニ「いや、なんでお前なんだよ！！」
藤「ちなみに作中の名前は偽名です。　ええ、偽名です」
ニ「苗字すら当たっていない……てか、ggdgdじゃね？」
藤「それじゃ！！」
ニ「話しかみ合ってねえ！！」

第六話　寮です（前書き）

お久しぶりです。

第六話　寮です

授業が全体的に終わった。

俺は校長こと藤龍に寮まで案内してもらった。

寮は４人部屋。　男子寮と女子寮はどうやら同じ建物らしい。

藤龍「君の部屋は５階にある５１２号室。　部屋のメンバーは自分の目で確認すること」

俺「は、はい。　ところで校長先生」

藤龍「藤龍でいいって言わなかったっけ？」

俺「じゃあ、藤龍先生。　さっき言いましたよね、俺には素質があるって」

藤龍「……そのままの意味だよ」

俺「だからそれって具体的にどういうｋ「ここだよ」……」

結局聞けなかった……。

俺は５１２号室に入ってみた。

二段ベッドが二箇所にあり、机が４つ。　トイレと洗面所は一箇所のみ。

藤龍「風呂場は一階にある。　場合によっては混浴になるのでそのつもりで」

混浴！！　俺は吹き出してしまった。

何考えてんだこの学校は！！

藤龍「ちなみに、６階より上にはいくなよ。　いったら退学処分にする」

俺「なぜ？」

藤龍「当たり前だろ、女子寮もあるんだぞこの建物には！！」

俺「その設定から先にどうにかしろ！！」

とにもかくにも俺は５１２号室に入寮した。

部屋においてある荷物から他の三人を推測してみた。

まず、音楽プレーヤーとＣＤとバッヂが大量においてある机がある。

……音楽。

次に、何かの書物が大量においてある机。　……書物。

最後に、同じフレームのメガネが大量においてある机。　……メガネ。

……推測不能！！

音楽プレーヤーの人はなんとなく分かったけどそれ以外……誰？

俺は部屋の中で他のメンバーが戻ってくるのを待った。

～～～～～15分後～～～～～

ガチャ

やっと来た！！

？？？「……あれ、もしかして新入り？」

カギを開けて部屋に入ったのはメガネをかけた和服を着た男だった。

俺「あ、どうも。　新しくこの部屋に入ることになりました、天羅新人です。　これからよろしくお願いします」

？？？「ああ、よろしく。　僕の名前は志村新八（しむらしんぱち）。　この寮の購買部の助手もしている。　こんどよってみてくれ」

俺「ああ、そうする」

俺は新八にいろいろと質問した。

俺「新八は戦うんだよな？」

新八「ああ。　主に剣で」

俺「剣か……俺と同じか」

新八「いや、僕の場合は日本刀だから」

俺「日本刀！？」

日本刀は確か古代に滅びた伝説の武器！　その切れ味は鉄をも切り刻むと聞く。

新八「五右衛門（ごえもん）じゃありませんから！！」

カチャ

？？？「あれ、開いてた」

2人目が入ってきた。　……それは

俺「クロウド！？」

クロウド「ん、なんだお前この部屋になったのか」

俺「いやぁ～、良かった。　知り合いが同じ部屋で！」

クロウド「そうか（もう一人は黙っておくか）。　ところでお前、俺の机においてあるマンガ、読んでないよな？」

俺「マンガ？　何それ？」

クロウド&新八「「……え？」」

俺「え？」

場の雰囲気が一気に気まずくなった。

クロウド「なんだよ、お前のもとの世界にはマンガが無かったのか」

俺「ああ。　でもなんでこんな面白いものが俺の世界に無いんだ！？」

新八「マンガの無い世界……考えられん！！」

カチャ

？？？「……お前ら、早いな」

クロウド「よっ、ネク。　新入りが入ったぜ」

ネク「新入り……ニートか」

俺「ニートってゆーな！！」

新八「ていうかマンガ無いのにニートという言葉はあるのか……ますます不思議な世界だ」

これで全員そろったみたいだ。　しかしネクも同じ部屋だったとは……質問する手間が省けた！

俺「なあ、ネクはどうやって戦うんだ？　　さっきの戦闘時にはネクが見当たらなかったけど」

ネク「……サラウンバイザーは付けたか？」

俺「サラウンバイザー？」

ネク「それを付けないと俺たちの戦いを見ることができない」

俺「それってどういう……」

クロウド「ネクやヨシュア、ビイト、そしてこいつの彼女のシキはサラウンドエリアというこの時空とは違う時空で戦うんだ」

ネク「そのときに、俺はこれらのバッヂを使ったサイキックで戦う。
　時空が違うからサラウンバイザーを装着しないと俺ら以外はノイズを見ることはできないし、戦いも見ることができない」

なんか……時空までかかわってくるのか……。

俺「……なあ、そのサイキックって今この場で使えるのか？」

ネク「使えるのもある。　　例えばこれとか……」

ネクは手袋のイラストが入ったバッヂを服に付けた。

そして右手をイスに向けてかざすと、なんと、イスが浮いた！！

ネクが右手を右に動かせば右に、上なら上に上昇した。　　まさに

サイコキネシスだ！

新八「サイコキネシスも知ってるのにマンガは「もうしつけえよダメガネ！」ダメガネじゃない！」

クロウドが言い放った。　やっぱドＳ。

ネク「まあ、こんなもんだ。　サラウンドエリアでなら他のバッヂも使える」

俺「そうなんだ」

そんな感じで、寮の雰囲気が分かった。

とりあえずよさ気なやつらが同室でよかった。　うん。

……にしてもクロウドのマンガ、はまる！　特にこの「ワンピース」とかいうやつ！！

なんで俺の世界にないかなあ？

第六話　寮です（後書き）

ニ「うん、よかった」
ネ「この作者のことだからろくでもない連中のところに放り込むと思ったんだが」
藤「そこまでひねくれてねえよ！！」
新「でもなんか狙ってますよね？」
ク「ま、いざとなったら俺が（ニヤリ）」
ニ「やっぱ外道……」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8063t/

なぜか吸い込まれた俺の学校生活

2011年11月13日09時14分発行